

《研究ノート》

## 「井戸」検出に伴う「土坑」の検討

久世 康博

### 1. はじめに

発掘調査を実施していると、井戸を検出することがよくある。この種の遺構を検出したとき、検出時点で井戸枠(痕跡)を確認している場合は問題なく井戸と認定できる。しかしそうでない場合、土坑と井戸との区別を明確にできないこともある。その規模や土質などから推定しつつも、不確定要素を多分に持ちながら土坑状遺構を掘り下げ、結果的に土坑の下層でプランを検出したり、土層断面によって井戸と確定することもある。あるいは当初は土坑その他の遺構の認識で掘下げたものの、完掘した結果下層に井戸があったと確認することもある。こうした検出のプロセスにはしばしば遭遇するところである。

ここに於いて、土坑と井戸には何らかの相関関係があるのではないかと推定を得ることができるであろう。そしてまた井戸との関わり、またそれを使っていた人々との関わりについても、ある程度の推定が可能となるのではないかと。このような指標を以て、小稿では今まであまり着目されることの無かった、井戸検出に伴う土坑状の遺構について検討することを主眼とするものである。

### 2. 井戸検出時の様相

先にも触れていたのだが、あらためてこの種の土坑と井戸との関係を、検出状況から検討してみることにしておく。

井戸の直上で検出される土坑状遺構を観察してみると、次のような傾向が認められる。

まず第一に、その形状についてであるが、平面形は概して井戸枠本体の形状に即している例が多い<sup>(1)</sup>。しかも土坑状遺構は、井戸本体を中心とした位置関係を示していることが多い。

次に井戸と土坑の検出状況について、平安京では多時期にわたる営みの結果、遺構の検出密度が高く、遺構同士の切合いも激しくなっており、相互の関係を把握し難いことにしばしば遭遇する。それにも関わらず、井戸と土坑がセット関係で検出されているかのように見出せる。逆に遺構の密度が低い遺跡でも、他の地点で穿たないで井戸の直上で検出されている様子が見てとれる。

さらに両者から出土する遺物については、時期差があまり認められない例と、逆に埋井当初と最終的に埋まった時期にかなりの差を見するという両極端がある。しかし後者の場合、一気に飛び越えているのではなくて、一定程度の時間差を追いながら埋まっていった様子を、出土遺物や断面図から認めることができる。

そして接近した時期の遺物が土坑内に据え置かれていたり、大量に出土することがある。とい

うように、一定の処理が施されていることがある。

このような点から井戸の直上で検出される土坑状の堀込は、その多くは偶然に掘り込まれたものだけとは言い切れず、井戸に対して一定の意図をもって掘り込まれたのではないかと、との認識を得ることが出来るかと思う。

次にこの土坑状の堀込遺構の呼称についてであるが、“堀込”“落込”“土坑”などの用語が考えられる。遺構の性格や形状などを勘案したとき、当てはまる適当な用語が無い。そこでこのような形態の遺構を土坑と呼ぶことが多いことから、小稿では一応“土坑”を採用したいと考える。そして位置関係からは井戸の直上で検出されることから、仮に<上部土坑>と称することとしておく。

### 3. 土坑の諸類型

それでは井戸上部の土坑を、掘形の断面の形状で分類してみることにする(図1)。

a レンズ状...概して直径と深さの比率が大きく、なだらかな凹みを呈していることが多い。井戸枠を中心として、その内外に及ぶものがある。当初の掘形以上に及ぶ例もある。何れにしてもその規模の割に堆積土は薄く、単層あるいは数層に及ぶこともあるが、人為的に掘り下げたと考えするには困難が伴うであろう。井戸枠(痕跡)・掘形の範囲内で収まることもあるが、更に広がって端部が面取された形態もある。出土遺物はほとんど無いと言え、あっても小片・少量である。

b 船底型...土坑の掘形はa レンズ状より深く、断面の形状・規模から、人為的に掘り下げても不自然ではないかと思われる。井戸遺構内における位置は、井戸枠内・掘形内・掘形をオーバーするパターンがある。基本的には井戸本体を中心として掘り込まれているが、偏在したところで掘られていることもある。このタイプには、土器や石あるいは木材を一定の目的を持って据えていたかのようにして出土する場合がある。

c 搦鉢型...土坑の掘形はb 船底型より更に深くなっている。井戸本体を中心として掘り込まれていることが多い。bと同様に、土器・石などが意図的な出土を示していたり、多量に出土することもある。井戸本体との境界が不分明なとき、漏斗状の掘形と報告する場合もある。

d 逆台形...土坑の掘形はb 船底型に比べて平らな底面を示しており、法面も比較的是っきりしている。深さは20~30cmから2m弱まで報告されている。遺構の平面規模は、掘形よりも大きく

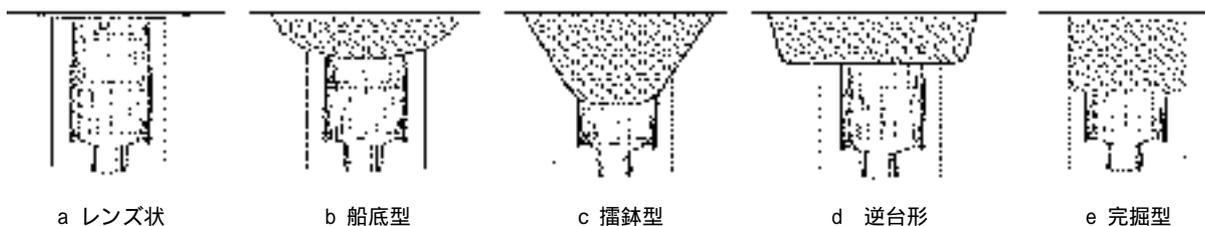


図1 上部土坑の基本類型

なっていることが多い。これも井戸本体は偏在したところに位置していることもある。土器や石の出土状況については量的には多いとは言えず、また特に明確な意図が見出せないことが多い。いわゆる段掘りと称されている例も、この範疇に入ることが多い。

e 完掘型...一見すると、当初の井戸掘形に沿って掘り込んだような形態である。部材が抜き取られているため、井戸を意識した堀込であると判断した。掘り下げる深さは井戸枠の一部を残すだけで、ほとんどが抜き取られていた感がある<sup>(2)</sup>。

f 不明...報告された図からは判断・解釈できない。

基本的なパターンは以上のタイプに分類できるかと思う。無論複合したタイプの堀込みも想定されるところである。このうちaは自然に形成されたものである。b～dもベースとなる土質によっては、当初に掘下げたよりも大きな規模となったり、変形していることもある。しかし得られたデータだけでは、本来の形状が判定できないこともあるので、小稿では提示された実測図を基に判断するものとしておく。eは他の場合と若干趣が異なるかと思われるが、井戸枠を意識した堀込を行っているために取り扱うこととした。

土坑プランの平面形状については、井戸枠の形状と連動することが多い。先にも触れていたが、井戸本体が掘形の中心からずれていることもある。そのうちの幾例かは後に掘り込んだ土坑が偏って掘られた結果と見てよい例がある。土坑の深さについても、後で述べるように目的に応じた深さまで掘り込まれたと見做してよい。

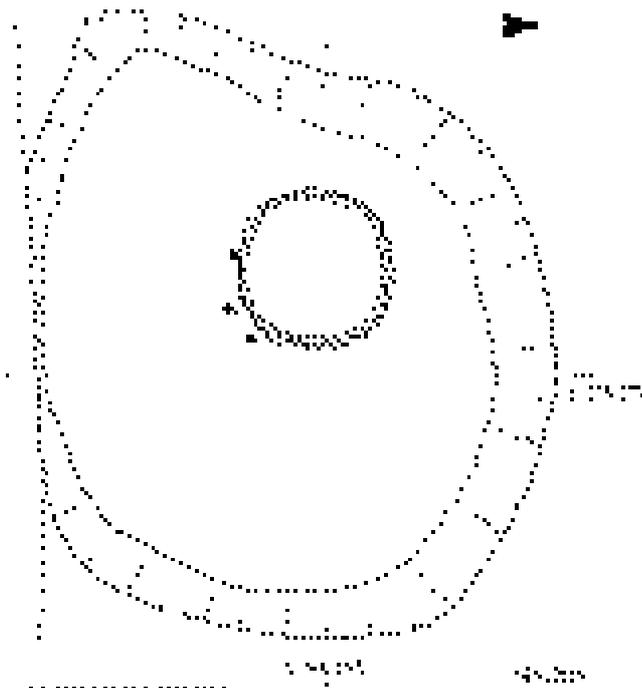
#### 4. 土坑への評価

先の類型から形態と遺物の出土状況から、このような遺構に対してどう評価するか、例を挙げつつ考えてみたい。

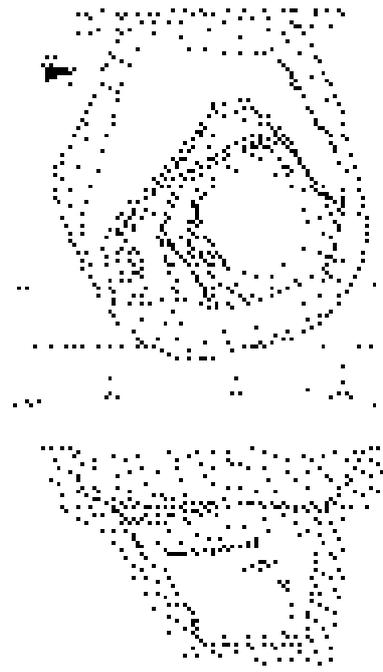
鑿井の足場として...類型c、dが多い。いわゆる段掘りとして紹介されている掘形を持つ井戸の中には、掘り出した土砂などを足場に一旦置いて地上に揚げる。又は井戸枠を設定するときに部材を一旦置いてから組み立てる、といった用途のために掘り込んだのではないかと考えられる。無論1段だけではなく、複数の段が作られることもある。

奈良・平城京左京三条二坊一坪(長屋王邸)<sup>(3)</sup>のSE5140(図2-1)は8世紀後半に埋められている。掘形の規模は平面径4.0m、深さ3.0mを測る不整形の井戸である。井戸枠は直径90cmの木を刳貫いて据えている。断面図を見ると、掘形の北側が検出面より約60cm下がったところで、一段テラス状になっていることがわかる。掘削時、井戸枠設定時いずれの時点に利用されたか速断できない。あえて推定してみると、段の下はほぼ垂直でこの壁に沿って枠が据えられている。つまり枠を南側から降ろして北側の段のところで受け止めて微調整をする。このような手順が想定されるのである。この土坑の類型はdのタイプに属すると考える。

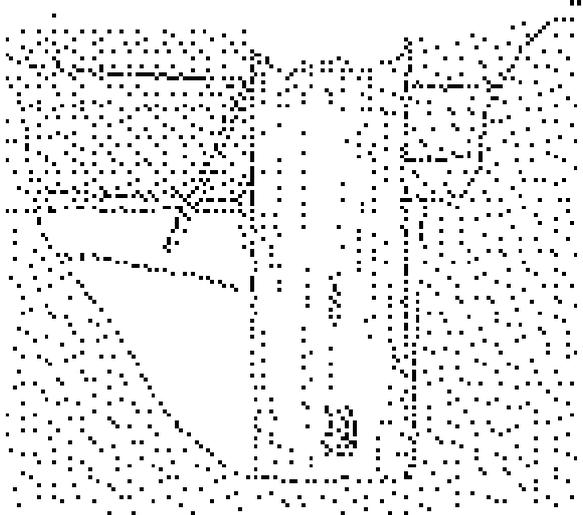
水汲の足場として...類型dでは土坑の底部が平坦になっていることがある。そしてその段差は20～40cm程度を示しており、またいで昇降するのも不可能ではない。このような段差が2～3段認められ、しかも段の端部に板などを設置している例もある。



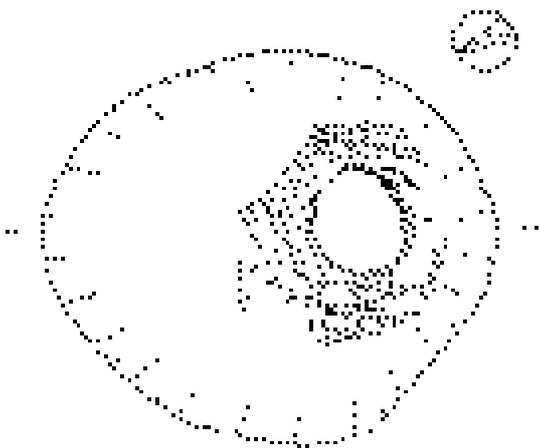
1. 平城京左京三条二坊一坪 SE5140



2. 京都・近衛西洞院 SE147



4. 京都御所東方公家屋敷群 SE2455



3. 草戸千軒町遺跡 SE190

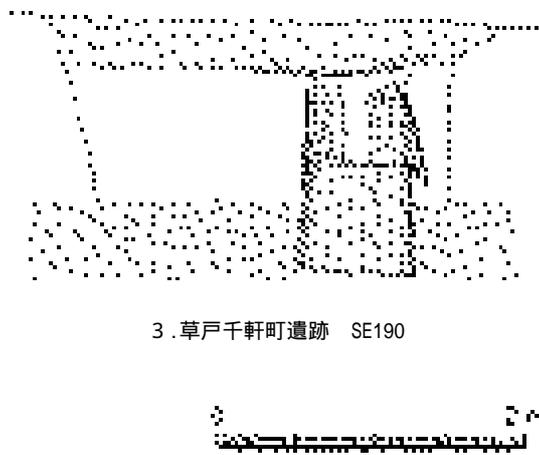


図2 井戸上部土坑各種(1) 縮尺1/50 (原図に加筆・改変した)

図2-2は、京都・近衛西洞院で検出が報告されている江戸時代の井戸である<sup>(4)</sup>。掘形の規模は平面径2.1m、深さ1.3mを測る不整形の井戸である。この井戸は交差点付近の路面のなかで検出されており、辻井戸としての機能を有している。堀込は2～3段あり、それぞれ40・30cmの段差があり各段はほぼ平らである。そこで井戸枠の上端が確認され、その周囲に板で六角形に囲んでいる様子が認められる。報告ではこれを水汲の足場板と考えている。この堀込の類型はdのタイプに属すると考える。

同様に広島・草戸千軒町遺跡の室町時代後期(16c)のSE190(図2-3)も、検出面より約30cm下った面で、井戸枠の上端の周囲を板で六角形に囲んでいる様子が認められる<sup>(5)</sup>。この土坑もdの類型である。「京都御所東方公家屋敷群跡」の調査で、階段を設置する江戸時代前期の石組井戸が検出されている(図2-4)<sup>(6)</sup>。これは何れも井戸本体が掘形の中心にではなく、偏在したところで検出されており、このような階段を設置するためではないだろうか。材質の違いはあるが、地表から下ったところで水を採取するという形態は、かようなものであると想定してよいであろう。

改作目的のために...井戸を使っているうちに、井戸枠が破損したり腐蝕することがある。あるいはその他の理由により、改修・作り替えを余儀なくされることもあるだろう。その手順は、まず改修などに必要な部分まで周囲を掘下げて、井戸枠を取り換えた後に埋め戻していることが、土層断面の検討からも指摘できる。井戸枠の組み方も変化が認められる場合が多い。

奈良・平城京右京八条一坊十一坪のSE930(図3-5)<sup>(7)</sup>は、掘形の規模は径3.6～4.0m、深さ3.5mを測る隅丸方形の井戸である。当初の井戸枠は横板組で、これを4本の柱で支えている。そして底から2.5mの位置で当初井戸枠の上に新たに縦板組で継ぎ足している。検出時の掘形(類型c)はこのときに穿たれたもので、堀込は約1.0mを測り、継ぎ足しの部分とほぼ一致する。遺物は当初の井戸枠内部から奈良時代前半の土器、後補の井戸枠内部から奈良時代末期の土器や瓦片が出土している。

修理については、内側から補修しているのは確認できるが、外からの補修痕跡は菅見では認められない。作り替えに関しては、内側に二重・三重に作り直す例はよく報告されているところである。井戸枠を抜き取って新たに作り替えるのは、次の の範疇として捉えてもよいかと考えている。

井戸枠抜取坑として...掘立柱建物の柱を抜き取るときに、柱抜取穴を確認することがしばしば認められる。木組井戸の場合、これと同様の考え方で井戸枠の周囲を穿って一定程度掘下げ、それから部材を抜き取りやすくする方法である。なかには抜き取り中に埋まってしまったものもあるが、多くは井戸そのものは残存せず、上部土坑との関係から抜取の痕跡が示唆されることが多い。先の類型b、cのタイプに多く認められる。

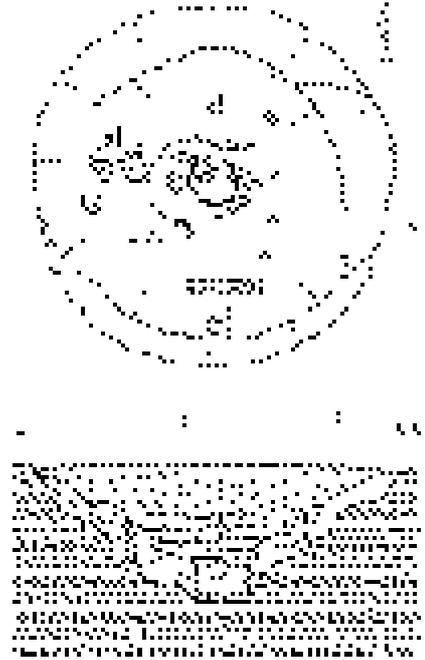
石組井戸の場合、多くは類型eのタイプの当初の掘形に近接した抜取坑を穿っているようである。石組が残存している場合、底部に1・2段から数段以内を残している。あるいは上から数段取り外しただけの例が認められる<sup>(8)</sup>。しかし石が全て抜き取られていると、判定しづらい側面がある。



5. 平城京右京八条一坊十一坪 SE930



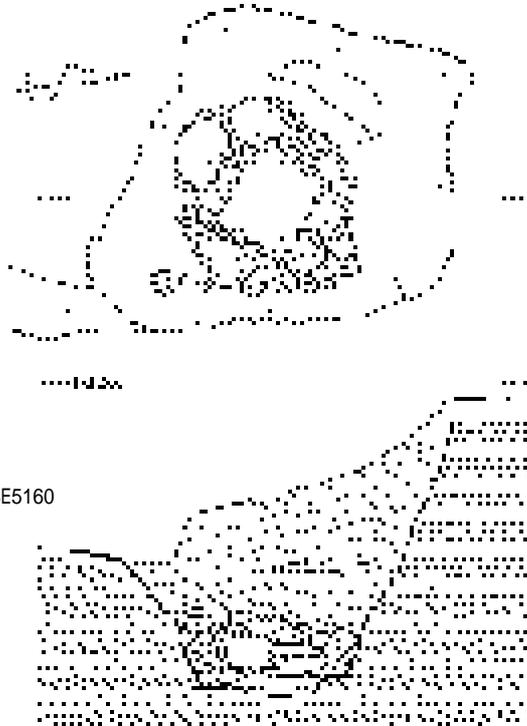
6. 平安京左京北辺三坊六町 SE288



7. 長岡京左京二条四坊三町 SE33302



8. 藤原京左京二条一坊東北坪 SE5160



9. 溝口1号遺跡 SE1



10. 百間川沢田遺跡・井戸10

図3 井戸上部土坑各種(2) 縮尺1/50(5,6は縮尺1/100) (原図に加筆・改変した)

京都・平安京左京北辺三坊六町のSE288(図3-6)<sup>(9)</sup>は、一辺4.0~4.8m、深さ4.4mを測る不整形の井戸である。井戸の構造は方形縦板組横棧留で、更に中央には横板組の水溜がある。この井戸は大きく3回(11世紀末~12世紀中頃)に分けて埋められている。うち最初に埋められた時の様子は、北・南辺の縦板を抜き取っており、東辺の板は倒れ込んでいる。これはおそらく北・南辺の縦板を抜いた時点で埋井を開始し、その途中で東辺の板が倒れ込んできたのではないかと考えられる。縦板は約1m残っており、切り取ったものか?この板を抜き取る(切り取る)時に、上から大きく掘り込んで(類型c)、作業の安全性と効率化を図ったのではないだろうか。

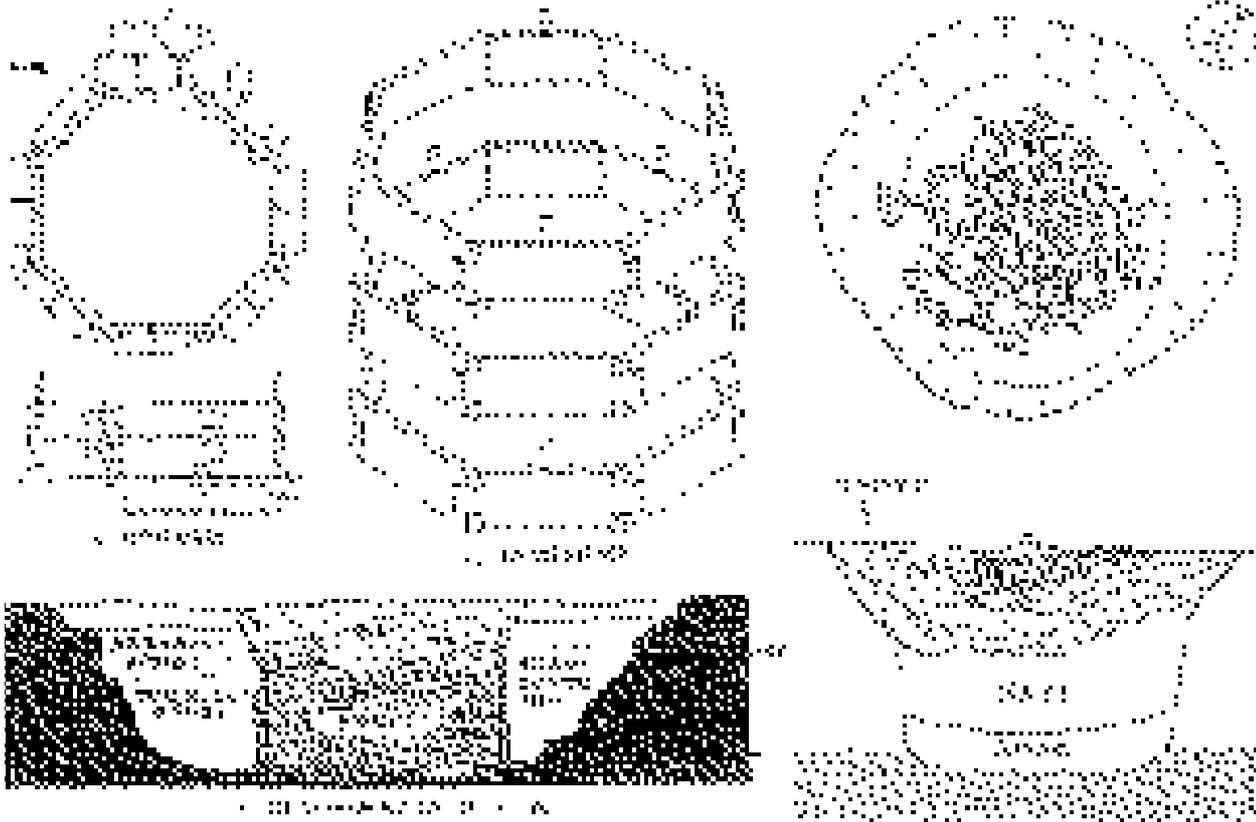
木組井戸の例として、京都・長岡京左京二条四坊三町のSE333002(図3-7)<sup>(10)</sup>は、掘形の直径2.3~2.4m、深さ0.9mを測るほぼ円形の井戸である。井戸の構造は部材が全て抜き取られているため不明だが、掘形の痕跡から円形の井戸枠(推定径、0.55~0.6m)で、水溜としての曲物は残存していた。井戸枠の規模に比して掘形が大きいこと掘形の中位付近が僅かに円形段状になっている。そして土層の堆積状況から、井戸枠が抜き取られるときに東西方向から掘り込まれたようである(類型e)。藤原京左京二条一坊東北坪・飛鳥時代のSE5160(図3-8)<sup>(11)</sup>は、平面六角形の掘形・深さ約60cmの土坑(類型b)によって、井戸部材がすべて抜き取られている例である。

石組井戸の例として、広島・溝口1号遺跡のSE1(図3-9)<sup>(12)</sup>は、掘形の一辺2.25~2.8m、深さ1.96mを測る不整形の井戸である。井戸の構造は内法0.9mを測る石組円筒形で、出土した遺物から19世紀に埋められたと考えられる。検出面から約1.4mは既に抜き取られており、底から2~3段の石組が残っている。実測図を見ると、掘形が石の切れ目から急に広がっているように見えるところから、石を取るときに、新たに掘り込んだのではないかと想定することが出来る。

塵芥処理坑として...水溜りや池などを土砂で埋めたとき、土が締まるにつれて沈下してくることは一般によく知られている。井戸の場合も同様で、土砂で埋井を行った後にその沈下した窪みを利用して、そして更に拡張したりして塵芥処理坑とするものである<sup>(13)</sup>。土坑からは種々雑多な遺物が出土したり、土器などが明らかに投棄された様子が認められることがある。なかには火災後の処理のためか、灰・炭・焼けた木製品・土器などが出土することもある<sup>(14)</sup>。先の類型b、cのタイプに多く認められ、数量的にもっとも多く報告がある。

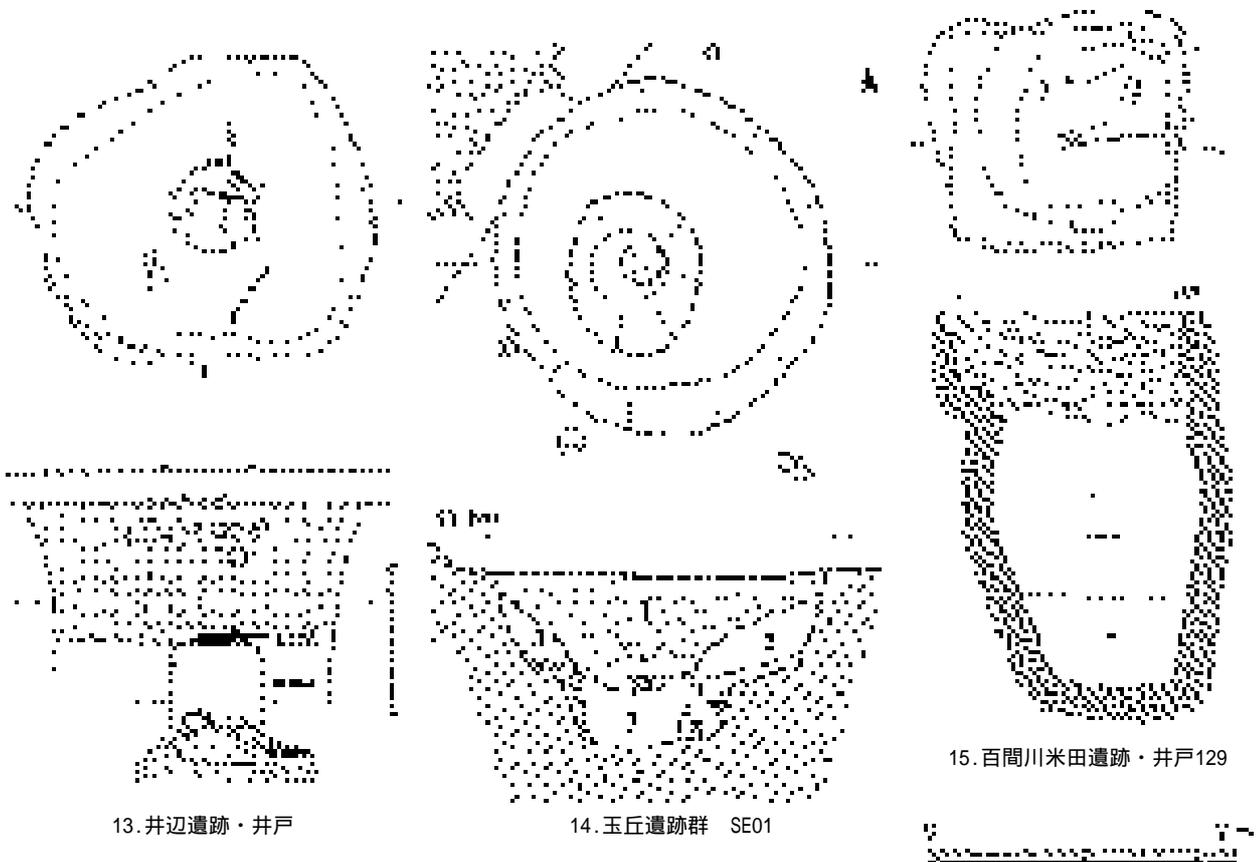
岡山・百間川沢田遺跡の井戸10(図3-10)<sup>(15)</sup>は、掘形の径1.38~1.5m、深さ1.18mを測る古墳時代前期の楕円形素掘りの井戸である。この井戸は廃棄時に完形の土器(甕3個体)を入れて鎮井のための祭礼を行った後、しばらく経過してから再び掘り込んで(類型c)、多量の土器・ガラス滓・石帯などを一気に投げ入れたようである。更に焼土・炭も混入していたようである。このように多量の遺物が出土するのは、礫が貼り付けられたように検出されている土坑状の掘込からである。また出土状況も特に方向性を持ったものではなく雑然と投棄されたような状態が実測図から窺える。

奈良・平城京左京四条二坊一坪のSE2600(図4-11)<sup>(16)</sup>は、掘形の直径4.1m、井戸枠内法1.5m、一辺0.595~0.645m、深さ1.0mの平面八角形の井戸である。塼を八角形に並べ、その上に木枠を八角形に組み上げる。出土する遺物から、この井戸が造られたのは8世紀中葉、埋められたのは



11. 平城京左京四条二坊一坪 SE2600

12. 草戸千軒町遺跡 SE3690



13. 井辺遺跡・井戸

14. 玉丘遺跡群 SE01

15. 百間川米田遺跡・井戸129

図4 井戸上部土坑各種(3) 縮尺1/50 (原図に加筆・改変した)

8世紀末と考えられる。そして井戸枠の直上には、9世紀後葉に埋まったと見られる、土坑状の堀込(径2.0m、類型c)がある。土坑から瓦・埴が多量に出土しており、土器・木材・石なども出土している。これらの遺物は実測図を見るかぎりでは雑然とした様子で、特に何かの意図を持っているとは考えられない。

地盤改良・補強...旧稿でも指摘していたのであるが、水の中に土砂を入れることによって軟弱な地盤となる。これを改良・補強するために、上部土坑あるいは井戸枠内に石を入れる例が時に認められる。

広島・草戸千軒町遺跡のSE3690(図4-12)<sup>(17)</sup>は、検出径2.8m、深さ1.5mを測る円形井戸である。検出時に井戸枠は認められなかった。出土遺物から室町時代後期(16c)に埋まったと考えられる。井戸内の堆積状況は、中位くらいまでは一気に埋め、引き続いて或いはしばらく間を置いて、掘形を拡張するように掘り下げ(類型b)を行って多量のグリ石を入れている。土坑状の堀込の下層が灰色粘土であるところから、埋井の当初はやはり軟弱であったものと見られる。そのため、石・礫を入れることによって地盤を補強する、という本来の目的があったものと考えられる。

蓋をする...先の類型b、c、dなどに何らかの意図をもって埋めたと認定できる場合、その多くは井戸に“蓋をする”ことが目的であったと指摘することができる。

和歌山・井辺遺跡<sup>(18)</sup>で検出した井戸(図4-13)は、掘形の径約2mを測る不整円形で、古墳時代前期に埋まったと思われる。断面図は模式図状だが、土師器(壺・甕・高坏)を多く含む堆積層(約80cm)の下層に、固い黄色土(約10cm)、更にその下層に青灰色粘土層がある。この粘土層内に割貫きの井戸枠(内径52cm、高さ79cm前後)を据えており、内部から多量の遺物が出土した。報文では黄色土内で井戸枠の真上に加工木・自然木を置いていた。黄色土および木材は更なる湧水を止めるという意味で、井戸枠の蓋のような役割を果たしていたと考えられる。本来1段の井戸枠であった可能性が指摘されているが、断面図から見て上にまだ施設があったものと考え、類型eのタイプであると思われる。

祭祀目的...井戸にまつわる祭祀は数多くあり、鑿井時から使用中・埋井までその痕跡が認められるところである。井戸に関わる祭礼には井霊祭祀、願掛け、呪詛、鎮井祭、御井祭などがあるが、小論では井戸廃棄時の鎮井祭を中心とすることが多い。ときには上部土坑内に完形品や大型の土器が出土したり、比較的大きな石・多量の石を入れた土坑がある。これらについて以前に検討したことがあり<sup>(19)</sup>、小結としては土坑内で検出される土器・石は、相互に代用品となりうる可能性があるとして指摘することが出来た。そして必要としない湧水を押さえるため、あるいは既に埋まっている井戸を再び掘り返すことに対して、井戸神への慰撫の意を込めた供献として、壺や甕などの容器類を主として据え置く。つまり水は不必要であるが、しかしながら井戸神を封じ込めたり、押し込めて怒らせることもない。そこで井戸に《蓋をする》という概念で、井戸神にたいして融通性を持たせることにしたものと考えられる。

兵庫・玉丘遺跡群のSE01(図4-14)<sup>(20)</sup>は、掘形の径2.2~2.4m、深さ1.9mを測る平面楕円形で、井戸枠は抜き取られているが痕跡から径0.7mを測ることが出来る。出土遺物から、埋まったのは

13世紀中葉から後半である。埋井については、まず炭化物を充填したものと見られる。その後上部に土坑を掘り込み(類型c)、土坑の底に円礫を置き、その上に須恵質土器片口鉢を正位で据え置いている。このような遺物の埋置は意図的な埋納を想起させ、鎮井祭祀に関わる痕跡であろう。

崩落した結果...ベースとなる土層が砂質土の場合、水分を含むと急激に強度が落ちて、脆弱になるのは周知のことである。それ以外の土層でも、長期にわたって放置しておく、風化作用や雨水によってやはり脆くなってくる。その結果、端部から徐々にあるいは一気に崩落したものと考えられる。そのようにして出来た窪みが土坑状の落込みとなったものと思われる。この現象は埋まり始めた当初から、最終的に埋まってしまふ段階までの各時期に認められる。類型a～eいずれの場合でも、自然堆積による埋井が伴う場合がある。

岡山・百間川米田遺跡の井戸129(図4-15)<sup>(21)</sup>は、掘形の一辺1.2～1.3m、深さ2.4mを測る方形の掘形で、井戸枠は抜き取られているが、一辺は1.6mと推定できる。この井戸が埋められたのは鎌倉時代である。廃棄された当初は人為的に埋められており、のち土が締ることによる地盤沈下のため遺構面との間に隙間が出来る。そして最終的に埋まるまでの期間、掘形の北側を中心として侵食を受けて壁面が崩落していった様子が断面図および平面図から窺える(類型b)。図3-10の井戸でも断面図を観察すると、東側の端部が崩落したような形跡が認められる。

井戸に伴う掘込遺構に対する主な評価は、以上の様な点が挙げられる。そのうちでも、<sup>(1)</sup>が数量的にもっとも多く検出されているようである。<sup>(2)</sup>は通常我々が使用している意味での土坑の認識から若干外れるかもしれないが、形状から小稿でも取り扱うこととした。

井戸と祭祀との関わりは大きいと言える。そして本来は現実的側面からの行為であるのが、後に祭祀的要素を保持するようになる可能性を指摘することが出来る(<sup>(3)</sup>～<sup>(4)</sup>)。とくに<sup>(5)</sup>もまた井戸祭祀との関わりを無視することが出来ないため、十分な検討を必要とする。

## 5. 井戸と土坑の関係を検討する

土坑を形状で分類し、それに対する評価を行ってきたが、ここでは井戸と土坑の関わりを全般的に考えてみることにする。

今まで検討してきた土坑はどのタイミングで穿たれたのであろうか。基本的に鑿井時、使用中、廃棄時であるかと思われる。

鑿井・造作時に穿たれたものとしては、評価<sup>(1)</sup>、<sup>(2)</sup>の一部が、また土坑のタイプとしては類型dの一部がこれに該当する。これは鑿井・井戸枠造作作業の能率化を図るため、また完成後の使用形態を想定して為されたものと解釈したい。

使用中に穿たれたものとしては評価<sup>(3)</sup>がある。井戸枠の「継ぎ足し」「改修」を行っていた形跡が各地で報告されている。これは本来あった井戸枠が何らかの事情により使用に耐えなくなった。そのため一旦井戸枠(の一部)を抜き取り、必要な部分を改めて作り直したのであろう<sup>(22)</sup>。

廃棄時に穿たれたものとしては評価<sup>(4)</sup>～<sup>(5)</sup>があり、これに<sup>(6)</sup>の一部が加わって該当する。また土坑のタイプとしてはb～dの多くがこれに該当する。また更に分類すると、埋井当初に穿った

場合と、しばらく時間が経過した後に穿たれた場合がある。前者の例で確実な事例としては、類型 e・評価 がそうであると言え、さらに の場合もある。これらの多くは一時期に埋まったと考えられるようである。後者では、井戸枠本体が一旦埋まった時点(1次埋井)で、再び掘り返して土砂とともに土器や石で埋める(2次埋井)行為が為される<sup>(23)</sup>。なかには土器や石・木材などを、意図的に据え置いたようにして検出されることもある。1次埋井と2次埋井とでは遺物の出土量に差が認められることが多く、概して前者は数量は少なく完形かそれに近い土器、後者は量は多いが破片の例が多い。またそれぞれの時間差は接近している場合もあるが、長期にわたる場合もある。一般的に堀込の規模が大きいときは、後者の例になることが多いようである。

次に時期的・構造的変化について述べてみたい。井戸の構造としては、基本的に大きく「素掘井戸」「木組井戸」「石組井戸」「漆喰・コンクリート井戸」の順に、主流となって多くを占めるようになる。このような材質・構造の変化と、上部土坑がどのように関わっているのか“抜取坑”を中心として検討してみることにする。

まず共通する現象として、井戸を放棄した時点で直ちに土砂などで埋め戻したり、或いはしばらく放置しておくことがある。その後再び埋め直したり、再掘削を行って埋井をする例が相当数あると見てよい。そして土坑自体の様式には大きな変化はなく、年代で追うことはできない。あえて云うならば、古墳時代以前では類型 a、b、中世までは類型 a～d が多く出現しており、中世後半以後はこれに類型 e を加えることができる。

弥生から古墳時代までは、素掘井戸が多くの比率を占めて検出されている。素掘りという形態のため、先述したように時間的経過とともに崩壊してくる可能性がある。そのため土坑との区別を判断しづらい点があるが、自然堆積や崩落などによる土砂の自然流入で、一定程度埋まったものと考えられる。あるいは土質によっては、崩落により掘形が拡張することもある。何れにしても素掘井戸の上部土坑は、塵芥処理を主とした目的として穿ったものと見られる。

第1次埋井では何らかの祭礼を行って埋まり、後にさらに拡張したり掘り下げて再び祭礼を行うこともある。また塵芥処理穴としても利用されて、最終的に埋められる。

飛鳥時代から平安時代後期頃では、木組井戸の検出が増加してくる。木組井戸の場合、構造物のために放置したままで土砂が流入するのは、素掘り井戸に比べて少ないと考えられる。また放棄した時点で井戸枠に使っていた部材を、再利用することもしばしば見受けられる。そのために抜取穴を穿って木材を抜き取りやすくしたと考えられる。つまり人為的な堀込に、井戸本体の抜取という要素が加わってくるのである。

平安時代後期以降では、木組井戸のほかに石組井戸の検出が多くなる。石組井戸を再利用する場合、その構築法から、木組井戸のように抜取穴を大きく穿つことが少なくなった。すなわち、上から順次石を抜き取るだけで、坑を穿つという労力が不要となった結果であろう。

江戸時代以降では、石組井戸のほかに塙で井戸を構築し、井戸専用の部材をつくるようになった。さらに後に漆喰・コンクリート井戸が出現してくるようになると、材質の性格上もはや再利用の必要性を認めない。そのため井戸廃棄の際には、なんらの工作をも施す必要はなかった。

非常に大ざっぱな見方であるが、材質・構造上の変化が掘取穴掘削の変化につながった要因があると見たい。

## 6. おわりに

小論では数多くある遺構の中でも、土坑状遺構と井戸との関係から、それらは何を目的として掘り込んだのか、形態・内容物・深さ・位置関係などから、その意図や役割(評価)の一端を明らかにすることが出来た。そこには大きく現実的側面と祭祀的側面がある。小論では主として前者を中心として述べてきたつもりであるが、それらの一部はやはり祭祀的側面(に至る)という観点を看過することは出来ないことも明らかとなった。

更にまた小論では“上部土坑”“1・2次埋井”という考え方を提案してみたい。前者は井戸との位置関係から、後者は時間的な関係からとらえてみたものである。上部土坑は井戸の造作、使用そして廃棄に関わる掘込があり、その目的とするところはそれぞれの段階に応じた現実的・祭祀的側面に基づくものである。2次埋井は廃棄に関わる行為で、上部土坑掘削に引き続く、或いは併行して行われている現象である。そこには井戸が放棄された段階で井戸の存在が無くなるのではなく、井戸への畏怖感・塵芥処理坑・単なる窪みなどとして、なお残り続けている残像のような形を最終的に処理するものである。無論、ここでも現実的・祭祀的側面があることも見逃さない。

## 註

- (1) 無論そうでない場合もある。それは無関係な掘形であったかもしれないし、基盤土層の崩壊によって変形してしまった可能性もある。あるいは地上に出ている井桁の形に応じて掘られたのかもしれない。ここでは検出時の形状について検討を試みるものである。位置関係についても同様である。
- (2) 石組井戸では、数段の石を抜き取っただけの井戸を検出することがあるが、その事例については先のb、cの範疇に入れたほうがよいとも考えている。概ね井戸掘形の深さ半分以上の掘取の場合を想定している。
- (3) 『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告 - 長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』奈良国立文化財研究所 1995
- (4) 『京都府遺跡調査報告書』第33冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- (5) 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告1』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1993
- (6) 現在整理の途次にあるため詳細は不明である。「発掘成果をふりかえって2000」(『リーフレット京都』 146 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2001)
- (7) 『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1984
- (8) また木組井戸と同様に井戸枠の石を全て抜き取ったときは、最下段の胴木が残存していると石組井戸を想定することも可能であるが、判定できない場合も多い。
- (9) 『埋蔵文化財発掘調査概報』1980-3 京都府教育委員会 1981
- (10) 『京都府遺跡調査報告書』第28冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000

- (11) 『藤原京左京二条一坊・同二条二坊発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1987
- (12) 『寺家城・近信遺跡』広島県埋蔵文化財センター調査報告書第129集 1994
- (13) 井戸を放棄した時点だけでも塵芥処理坑としての性格が付与されるが、小論での趣旨とは異なっているため論究の対象とはしていない。
- (14) これらの遺物が出土したことで、直ちに井戸への祭祀と結論づけている論がある。しかし、全てが祭祀につながると考えられないこともあるようなので、この点に関しては別稿で論ずる用意がある。
- (15) 『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1985
- (16) 『平城京左京四条二坊一坪』奈良県教育委員会 1987
- (17) 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1995
- (18) 『復刻社会科教育資料(埋蔵文化財調査報告)』和歌山市教育委員会 1980
- (19) 久世康博「井戸はどうして埋まったのか(石を入れる)」(考古学を学ぶ会編『考古学論集』第5集 歴史堂 2001)
- (20) 『玉丘遺跡群1 ジヤマ古墳・城ノ内遺跡発掘調査概要報告書』加西市埋蔵文化財報告10 加西市教育委員会 1992
- (21) 『百間川米田遺跡3(旧当麻遺跡) 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査7』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1989
- (22) 翻って、改作と言うことになると、これは新たに井戸を作るという範疇で考えたほうがよいのではないかと考えている。そのため、この項目では扱わないものとする。修理・補修については、多くは対症的なものでもよく、大規模な掘込を必要としなかったであろう。改修についても、井戸枠の内側に再び作っている例があり、やはり土坑を穿つ必要がない。
- (23) ここで言う“1次”は井戸を直接埋めるということである。“2次”とは、井戸そのものに対してではないかもしれないが、井戸にかかわる一連の行為の最終段階として位置づけようとするものである。